The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	指示詞の体系を構成する二つの意味基準について
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 19-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

指示詞の体系を構成する二つの意味基準について

瀧田恵巳

1.　問題提起：本論文のきっかけと佐久間(1983)によるこそあどの分類

2021 年春の授業で、日本語と中国語の指示詞について次の相違点が明らかになった。
金水・木村・田窪(1989:27)や金井(2005)も指摘しているように、日本語では例(1)のように方角を表す「こちら」や「こっち」を用いて話し手を指すことがある。一方中国語では「こっち」に相当する「这边」で話し手を指すことはできないとのことであった[1]。

1)「そっち（＝きみ）にはずいぶん迷惑をかけたね」
「いや、こっち（＝わたし）こそ」　　（金水・木村・田窪 1989:27）

中国語の指示詞は「这」と「那」という近と遠の二系列で日本語のコソアの三系列とは異なるが、この日本語と中国語の相違は明らかに遠近によるものではない。例(1)に関する日本語と中国語の指示詞の用法の相違はどのように位置づけることができるだろうか。
佐久間(1983:7)はこそあどの語彙を次のように分類している。

	もの	方角	場所	もの・人（卑称）	性状	指定	容子
近称	コレ	コチラ、コッチ	ココ	コイツ	コンナ	コノ	コー
中称	ソレ	ソチラ、ソッチ	ソコ	ソイツ	ソンナ	ソノ	ソー
遠称	アレ	アチラ、アッチ	アソコ	アイツ	アンナ	アノ	アー
不定称	ドレ	ドチラ、ドッチ	ドコ	ドイツ	ドンナ	ドノ	ドー

表 1　佐久間(1983)によるこそあどの分類（同書、p.7 の表に基づき作成）

表 1 のマトリックス（行列）による分類は二つの意味基準によって成立している。
縦軸の基準は「指示」関係に由来する。佐久間(1983:6)によると、この基準は「自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置をとり、どの方向にあり、どういう有様を呈しているか」を示し、その下位分類（近称、中称、遠称、不定称）は話し相手との関係における人代名詞の称格（自称、対称、他称、不定称）に対応している[2]。
横軸の基準は指し示される対象の大まかな属性を表す。その下位範疇は指し示される対象

[1] この指摘は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻博士前期課程の徐悦文氏によるものである。
[2] 古田(1980/1992:15)によると、「近称、中称、遠称、不定称」の名称による分類は大槻文彦の『語法指南』(1889)に見られる。また古田(1980/1992:17-24）は、アストン(W. G. Aston) の A Grammar of the Japanese Written Language 第二版（1877)が既にコソアを人称に関連付づけていると指摘している。

が事物であるか状態であるかによって区別され、「もの」、「人（卑称）」にとどまらず、「性状」「指定」「容子」なども含まれる。これらは品詞の点で名詞の範疇には収まらないため、佐久間(1983:7-13)は、こそあどの名称として当時一般的であった「代名詞」という名称を不適切とし、「こそあど」、「指す語」、「指示詞」と呼ぶ。

表 1 に当てはめると、例(1)に見られる日本語と中国語の相違は縦軸の指示機能ではなく、横軸の対象の属性に関わることがわかる。つまり日本語では場合により方角を表す語彙で人称を指すことが出来るが、中国語ではそれができないのである。

このように二つの意味基準は他言語の指示詞にも適用することができ、また実際に指示詞を二つの基準によって体系化する研究も見られる。

さてこの二つの基準に該当するものとして、既に「関係概念」と「範疇概念」が存在する。これらは井出(1958)によって提唱されたもので、岡村(1972)は関係概念を話し手が表現しようとするものごと（「素材」）と話し手が意識している「自分」との関係のしかたであり、範疇概念は「素材」を範疇化してとらえた大まかな質の差であるとする。正保(1981:61)も井出(1958)、岡村(1972)の見解を踏襲し、この二つの概念を指示詞の本質と捉え、二つの概念が分かちがたく融合して指示詞の意義を構成しているとし、佐久間のこそあどの体系は話し手との関係概念と指示対象の範疇概念を併せて表示したものであるとする[3]。

このように二つの意味基準は他言語の指示詞にも適用可能であるとともに、指示詞の体系を構成する概念であると考えられる。しかしこの二つの基準はなぜ言語を超えた普遍性を有するのか。またこれらが指示詞の体系を構成する要因はどこにあるのだろうか。

以上の問題を明らかにするために、本論文では、まず 2 で中国語とドイツ語の指示詞及びダイクシスを二つの基準によって体系づける研究を紹介し、二つの基準の共通性を検証する。3 では二つの基準の名称を統合し、指示詞の意味的特徴を普通名詞及び固有名詞と比較して考察することにより、その体系を構成する根拠を明らかにしたうえで二つの基準を定義する。4 ではまとめと今後の課題を提示する。

2. 二つの基準による分類に関する具体例の検証

2.1. 木村(1992)による中国語指示詞の分類

木村(1992:183)は、日本語のコソアとの対照に基づいて、中国語の指示詞「这」と「那」の現場指示に関わる語彙を佐久間(1983)に類似する二つの基準により表示する。

表 2 の縦軸の「近」と「遠」を統合する「指示領域」は、「指示」機能に由来する基準に当てはまる。一方横軸の「無範疇」や「事物」等を統合する「範疇概念」は、指し示される対象の共通属性に由来する基準に該当する。

木村(1992)においては、類似する二つの基準（「指示領域」と「範疇概念」）によって、中国語の「这」と「那」が日本語のコソアと並置して分類できることが示されている。

[3] 正保(1981)は 1966 年版のこそあどの体系を引用しているが、これは本論文の表 1 に該当する。

範疇概念 指示領域	無範疇[4]	事物	場所	方向	時間	様態・程度
近	这	这个	这里 这儿	这边	这会儿	这样　这么
遠	那	那个	那里 那儿	那边	那会儿	那样　那么
	こそあ（れ／の）	こそあ れ	こそあそ こ	こそあ っち	こそあ のとき	こそあ んな（だ／に）； こそあ —

表 2　木村(1992)による中国語の指示詞「这」と「那」の分類
（同書、p.183 の表に基づき作成）

2.2.　Sennholz(1985)によるダイクシスの分類

ドイツ語圏の代表的なダイクシス研究 Sennholz(1985)は、表３のように二つの基準（「関係タイプ Relationstyp」と「次元 Dimension」）によってダイクシスを六つに分類する。

次元 関係タイプ	空間ダイクシス	時間ダイクシス	人称ダイクシス
自己ダイクシス	空間自己ダイクシス hier「ここ」	時間自己ダイクシス jetzt「今」	人称自己ダイクシス ich「私」
非自己ダイクシス	空間非自己ダイクシス da「そこ」	時間非自己ダイクシス morgen「明日」、früher「以前」	人称非自己ダイクシス du「君」

表 3　Sennholz(1985)によるダイクシスの分類
（同書、p.43 の表に基づき作成。日本語訳と事例の付与は本論文著者による）

縦軸の「関係タイプ」は「自己ダイクシス Autodeixis」と「非自己ダイクシス Heterodeixis」から成る。「自己ダイクシス」はいわば一致する関係であり、ダイクシス関係の出発点である「原点(Origo)」と目標であるダイクシス対象が一致する(Sennholz 1985:46-47)。「原点」とは Bühler(1934/1982:102)によって提唱された術語で、その名称は指示場を座標に見立てると指示の起点が座標の原点となることに由来する。また原点の代わりに置かれるべき

[4] 木村(1982:205)は「無範疇」を「「这／那」が「这个／那个」以下の他の指示形式とは異なって、それ自身何ら範疇概念も担うものではないことを意味するもの」と注釈しており、いわば範疇概念としてはゼロであると見なしている。

指示詞として hier「ここ」、jetzt「今」、ich「私」が挙げられる。原点を巡っては諸説あるが、Sennholz(1985)によると、これら三つの指示詞は原点を表すと同時に言葉によって指し示されるダイクシス対象とも一致することから自己ダイクシスと見なされる。これに対して「非自己ダイクシス」には、原点とダイクシス対象が一致しない表現、例えば da「そこ」のように話し手の領域以外の場所、morgen「明日」や früher「以前」のように発話時以外の時、du「君」のように話し手以外の人物を表す表現が挙げられる。
横軸の「次元」には三つの下位範疇「空間ダイクシス Lokaldeixis」、「時間ダイクシス Temporaldeixis」、「人称ダイクシス Personaldeixis」がある。「次元」が三つである点に関して Sennholz(1983:43)は、多くの先行研究でも三分類であることを示すことで、その実用性を主張する。また Sennholz(1985:148)に「次元」という名称に関する記述があり、それによると、空間ダイクシスが「三次元性 Dreidimensionalität」、時間ダイクシスが「一次元性 Eindimensionalität」という物理的な属性を持つのに対し、人称ダイクシスは物理的な属性の無い「ゼロ次元性 Nulldimensionalität」、もしくは物理的な次元を否定する「非次元性 Adimensionalität」を有するものとする[5]。
表 3 の縦軸の「関係タイプ」は「ここ、今、私」に代用される原点と指し示される対象との関係に基づくという点で表 1 の「関係概念」と表 2 の「指示領域」という縦軸の意味基準に該当する。表 3 の横軸の「次元」は指し示される対象の属性に関わる意味基準であることから、表 1 及び表 2 の横軸の意味基準である「範疇概念」に該当する。

2.3. Diewald(1991)による指示詞の分類

同じくドイツ語圏のダイクシス研究 Diewald(1991)は、二つの基準を Sennholz(1985)とは別の理論的枠組みで捉える[6]。Diewald(1991:1)によると、ダイクシスは「言語による指し示し sprachliches Zeigen」であり、指示機能を持つことばが必須である点で指し示す動作とは異なる。Diewald(1991:19-20)は、指示対象が原点に対してどこに存在し、それが何であるかを述べることによってのみダイクシスは成立するとし、指示的構成要素と命名的構成要素の双方から成る「ダイクシス過程 deiktischer Prozeß」を導入する。
ダイクシス過程の指示的構成要素とはコンテクストに結合した方向関係であり、ダイクシスの起点である原点へ戻る「再帰的関与 reflexiver Bezug」とダイクシスの目標であるダイクシス対象へ向かう「指示的関与 demonstrativer Bezug」の二つの局面に分けられる。一方、ダイクシス過程の命名的構成要素は二つの意味論的軸「距離 Entfernung」と「次元 Dimension」から成る。「距離」とは原点とダイクシス対象間の隔たりであり、指示的構成要素の傾向が強く、原点を含むか否かによって「原点含有段階 origoinklusive Stufe」と「原点非含有段階 origoexklusive Stufe」に分けられる(Diewald 1991:20, 33-34)。「次元」とはダイクシス対象の種類であり、Diewald(1991:20,30-33)では、「空間次元 lokale

[5] Sennholz(1985)のダイクシス理論及び「次元」に関しては、渡辺（2009:170-173）も参照されたい。
[6] Diewald(1991) のダイクシス理論については瀧田(2005)も参照されたい。

Dimension」、「時間次元 temporale Dimension」、「人称次元 personale Dimension」、「もの次元 objektale Dimension」、「モダール次元 modale Dimension」という五つの下位範疇に分類される。従来の三つの次元（「空間」、「時間」、「人称」）に「もの」と「モダール」を加える理由として、Diewald(1991:143-144)はその先験性を取り上げる。「空間」と「時間」はアプリオリに存在し、「人称」もまた各コミュニケーション状況から先験的に与えられる存在である。「もの」もまた言葉にする以前に存在するか、もしくは想像されており、且つコミュニケーションの対話者とは区別される。ある事態が事実であるか否かという「モダール」も言葉以前の現象である。Diewald(1991:144)によると、これら五つの次元は本質的かつ恒常的な外界現象であり、必然的に言語化される。

以上のダイクシス過程の構成要素に従うならば、例えば話し手が自分のいる場所を指して「ここに私はいる Hier bin ich」と言う場合の「ここ hier」は、コンテクストに結合した方向関係として、原点への関与（ダイクシス対象を確定するにはまず原点である話し手の位置を探査する必要がある）**[再帰的関与]**、及びダイクシス対象（「ここ」という場所）への関与**[指示的関与]**を有し、また場所という空間**[次元]**で、原点を含む段階**[距離]**を示す。Diewald(1991)にはその試みはないが、命名的構成要素に従って指示詞及びダイクシス表現は表 4 のように分類することができる。なお Diewald(1991:231f.)によると、「モダール次元」の原点含有段階は事実の記述で無標であるため、表現としては乏しく、事実として述べる話者の態度を表す動詞の法「直説法」が当てはまる。一方、原点非含有段階は事実ではないものとしての記述であるため、蓋然性を表す語彙を挙げられる。

次元 距離	空間次元	時間次元	人称次元	もの次元	モダール次元
原点含有段階	hier 「(原点を含有する場所としての）ここ」	jetzt「今」	ich「私」	dieser「これ」	[事実的] 直説法
原点非含有段階	dort「あそこ」	einst「かつて、いつか」	du「君」	jener「あれ」	[非事実的] wahrscheinlich「おそらく」

表 4　Diewad(1991)の命名的構成要素に基づくダイクシス表現の分類
（同書の記述に基づき作成。日本語訳は本論文著者による）

表 4 の縦軸の「距離」は指示的構成要素に関連する指示機能の由来する基準であるという点で、表 1 の「関係概念」、表 2 の「指示領域」、表 3 の「関係タイプ」と共通しており、横軸の「次元」は空間や時間等の対象の共通属性に関する基準であることから表 1 と表 2 の「範疇概念」及び表 3 の「次元」に該当すると見なされる。

3. 考察：二つの基準の名称と意味論上の位置づけ及び定義

2 で検討した結果、木村(1992)、Sennholz(1985)、Diewald(1991)による基準は表 5 のように佐久間(1983:7)のこそあどの体系を構成する二つの基準に対応させることができる。

佐久間(1983:7)	木村(1992)	Sennholz(1985)	Diewald(1991)
指示関係の基準 （「関係概念」）	「指示領域」	「関係タイプ」	「距離」
指示対象の属性の基準 （「範疇概念」）	「範疇概念」	「次元」	「次元」

表 5　二つの基準の対応関係

本論文では二つの基準の共通特性を認め、これらを統一する名称として「距離」と「次元」が最適であると考える。その理由は次のとおりである。

第一に「距離」と「次元」は卓越して簡潔な名称である。

第二に、「距離」と「次元」は指示詞の体系を構成する意味素性であり、命名的構成要素としてこれらの名称を与えた Diewald(1991)の見解を踏襲することに意義が認められる。

第三に「距離」と「次元」という名称の柔軟性と包括性が挙げられる。

「距離」という名称は、話し手及び聞き手からの隔たりに通じ、佐久間(1983)の「近称、中称、遠称、不定称」及び木村(1992)の「近、遠」という段階的な下位分類を統合するうえで柔軟に対応することにできる名称である。一方、「関係概念」や木村(1992)の「指示領域」及び Sennholz(1985)の「関係タイプ」という名称はその段階的な要素に欠けている。

「次元」という名称もまた柔軟性と包括性を併せ持つ。Sennholz(1985)においては「空間」の物理的三次元性、「時間」の物理的一次元性、「人称」の「ゼロ次元性」及び「非次元性」に由来するが、より広義に指示対象の属性と捉えれば必ずしも三つに限定する必要はない。Diewald(1991)は五つの次元を挙げているが、久慈・斎藤(1982)においても、日本人幼児のこそあどの獲得順序を調査・表示する際、指示対象の属性を「場所次元」「もの次元」「指定次元」「方角次元」という「次元」を取り入れた名称を用いて区別している。

さて 2 では距離と次元の共通点を指摘してきたが、そもそもこの言語を超えた普遍性は何に起因するのだろうか。

距離と次元は Diewald(1991)いう指示詞の命名的構成要素であり、井出(1958)、岡村(1972)、正保(1981)のいう指示詞の本質であるが、その真偽は指示詞以外の範疇と比較することによって判明する。瀧田(1999, 2001)は日本語の指示詞の意味特徴を普通名詞及び固有名詞と比較するが、その前提として、言葉の意味を言語の構造と機能の観点から、バンヴェニスト(1983)[7]の構造言語学の見解に基づく「構造的意味」と鈴木(1973)[8]及び時枝(1941)[9]の

[7] バンヴェニスト(1983:99-107)は、言語を体系と見なすのはその構造の分析を問題にするからであるとする。また「おのおのの体系は相互に条件付け合う単位の内的配列、すなわちこれらの単位の構造を組み

見解に基づく「機能的意味」に大別する。

「構造的意味」とは、言語体系の構造を分析する二つの操作（「線分分割 segmentation」と「代入 substitution」）[10]によって導き出される意味であり、ある上位概念に基づく一面的な意味記述であるとともに、その上位概念の範疇に属する構成員同士の示唆的特徴である（瀧田 1999:331-334,337-341）。例えば「私はそばをすすった」という文において、「そば」の代わりに代入可能な普通名詞を「麺類」という上位概念の範疇にあるものとし、その範疇内の他の構成員（「うどん」「そうめん」など）と比較すれば、「そば」という語について、例えば「そば粉を水でこねて薄くのばし、細く切った食品」（『明鏡国語辞典』）といった一つの共通特性（「麺類」）に基づく示唆的特徴を記述することが出来る。このように「構造的意味」にはある上位概念に基づく客観性が担保され、それにより他言語との比較を容易にするが[11]、その一方で別の範疇への拡張は排除される。

「機能的意味」は、言語活動を行う主体の認識に主眼をおいたもので、「その言語形式を通じて得られる知識や経験から成る言葉の内容」（瀧田 1999:337）である。先ほどの「そば」を例にするならば、そばが嫌いな人とそば通の間では、「そば」という言語形式から得られた知識や経験は大いに異なる。このように「機能的意味」は個人差を前提としている。

瀧田(1999:341-342)によると、普通名詞は先の「そば」の例に見られるように、構造的意味と機能的意味の両方を持つ。それに対して固有名詞は、本質的にある特定の対象にしか

立てている配列関係によって、他の体系とは異なっている」(同書、p.103)という見解を示し、言語の構造を分析することにより言語を相互に比較・対照することが可能になることも示唆している。

[8] 鈴木(1983:90-93)は、一つの言語社会に属するすべての人々の間でほぼ共有されているであろう基礎的な語彙がどのようにして学習されたかという観点から、一般的なことばの意味を「ある音声形態（具体的に言うならば、『犬』ということばの『イヌ』という音）との関連で持っている体験および知識の総体」（同書、p.92）と規定し、このように規定されることばの「意味」には、二つの性質【①ことばの意味は個人個人によって非常に違っている。②ことばの「意味」はことばによって伝達することはできない】が含まれるものとする。本論文の「機能的意味」はこの鈴木の規定に依拠し、特に①の性質に着目している。

[9] ことばの形式と内容は分かちがたく結びついており、一方なくしては言葉として成立しない。しかし両者の間には必然的な結びつきがないことはソシュールが言語の恣意性において提唱するとおりである。では、ことばの形式と内容を結びつけているものは何か。これに関して時枝(1941/2007:26-28)は、言語は主体的活動に基づくものとし、主体の認識を通じて音声や文字に意味が結びつくという見解を示している。

[10] 言語を各部分が関連して全体を構成する構造と見なすことは、同時にある単位をさらに諸要素に分割し、互いに関連付ける研究方法に結びつく。本論文ではバンヴェニスト(1983:129)に依拠し、構造分析は、全体を構成する諸要素に分割する「線分分割」と、その構成要素と同じ範疇に蔵すると見なされる他の記号に置き換える「代入」という二つの操作から成り立つものとする。

[11]線分分割により構成要素を割り出し、要素間の関係を記述することは、他言語との比較・対照を容易にする。例えば、日本語で「私はワインを飲みます」というところを、ドイツ語では Ich trinke Wein という。文成分に分割すると、日本語は〈主語＋目的語＋動詞〉の順だが、ドイツ語は〈主語＋動詞＋目的語〉の順であり、文成分の順序が異なることがわかる。さらに日本語は主語や目的語に原則として助詞が付くのに対して、ドイツ語の場合、名詞そのものが格変化して文内での役割を示す。このように線分分割が単位の内部構造を明らかにする一方、代入は構成要素そのものの特性を明らかにする。鈴木(1973:10-13)は、日本語の「のむ」の用法を英語の drink の構造と比較する観点から、「のむ」と呼ばれる動作の対象を次々に代入し、この動作は液体(「お茶をのむ」)・固体(「錠剤をのむ」)・気体（「タバコをのむ」）のいずれも対象としてとりうることを見いだす。さらに「ご飯を食べる」という文の「食べる」という部分に「のむ」を代入し、「食べる」と比較する。すると「食べる」も「のむ」も同じく口にものを入れ、体内に摂取する行為を表すが、「のむ」という行為は咀嚼を伴わないことがわかる。以上の代入操作により、鈴木(1983:13)は、「のむ」を「何ものかを、口を通して、かまずに、体内に摂取すること」と規定する。

適用されないため、上位概念において他の構成員を区別するという構造的意味は不要である一方、各固有名詞にはそれを通じて得られた様々な個別の知識や経験、つまり機能的意味が蓄積される（瀧田 1999:342-345）。
指示詞には、普通名詞と同様、構造的意味と機能的意味があるが、その特筆すべき点は、「対象と主体との関係において示す」(瀧田 2001:416) という構造的意味を持つ点にある。例えば砂糖と書かれたラベルの付いた瓶を指さして「これを明日持ってきてください」と言われた場合、「これ」は厳密にいえば話し手の指さす先にある「もの」すべてを指し示すことができる。つまり、例えば「瓶」「ラベル」「砂糖」「瓶のふた」「ガラス」等の様々な属性を持つものが考えられるのである。この「対象と主体との関係」という言語活動に関わる意味は本論文の「距離」に該当するが、これは同時にその遠近によって各指示詞を互いに区別する構造的意味でもある。そして指示詞はこの言語活動に由来する構造的意味を持つという点で普通名詞及び固有名詞と明確に区別される。また瀧田(2001)では指摘されていないが、上記の「これ」によって表現される対象の属性はせいぜい「もの」でしかなく、普通名詞に比してはるかに少ない。この「次元」という対象の僅少な属性もまた指示詞を普通名詞から区別し、個々の指示詞を互いに区別する構造的意味である。
指示詞の機能的意味に関しては、その習得過程や使い方の個人差が挙げられる。迫田(1998:108-110)は、小学 3 年生の日本人児童による第一言語の習得過程に関して、会話の中で現場の事物を指示する現場指示用法については 91.5%という高い正答率を示し日本人成人との間に有意な差が見られなかったのに対し、言語テクストにおける先行詞を照応的に示す「単純照応用法」の正答率は 69.6%で成人との間に有意な差がみられることを報告している。指示詞の使用上の個人差に関しては、服部(1968/1992)が指摘する出身地による対立型と融合型の認識の相違などが挙げられる。
以上のことから、距離と次元は指示詞の体系を構成するとともに、指示詞を普通名詞と固有名詞から区別する構造的意味であることが分かる。つまり距離と次元は、普通名詞及び固有名詞に対して指示詞が存在する如何なる言語にも通用する指示詞の本質なのである。
それでは 2 の分類例と 3 の考察により、距離と次元を定義しよう。
距離のポイントは、ダイクシスの起点と目標との関係にある。その起点として最適な概念は、指示詞によって表現される指示場の中心として発話の時点、場所、発話者等を包括的に示す原点(Origo)である。ダイクシスの目標に関しては、厳密にいえば、指示詞によって指示されるダイクシス対象と意図された指示対象の区別がある。例えば地図上の一か所を指し示しながら「私たちは今ここにいる」という場合、指示詞「ここ」が指し示すダイクシス対象は地図上の位置であり、意図された指示対象は話し手のいる現在地である。従って指示詞の意味を扱う点ではダイクシス対象という名称の方が適切である。この名称に従うと、次元とはダイクシス対象の僅少な属性となる。さらに構造的意味という要素を加えると、距離と次元は次のように定義される。

「距離」: 原点(Origo)とダイクシス対象との関係を上位概念とし、その範疇に属する指示詞の意味内容を互いに弁別する示唆的特徴

「次元」: ダイクシス対象の僅少な属性を上位概念とし、その範疇に属する指示詞の意味内容を互いに弁別する示唆的特徴

4. まとめと今後の課題

本論文では、日本語と中国語の指示詞の相違を出発点に、佐久間(1983)の指示詞の体系における二つの基準に着眼し、木村(1992)、Sennholz(1985)、Diewald(1991)による体系の基準と比較してその共通性を検証し、「距離」と「次元」という名称で統合した。さらに普通名詞と固有名詞に照らし合わせることにより、距離と次元が指示詞の構造的意味であるとともに言語を超えた普遍性の根拠になりうることを示し、その定義づけを行った。

従って距離と次元はダイクシス表現のさらなる比較・対照を可能にする。

距離の基準からいえば、日本語のこそあどのうち指定の意味を持つコソアは、確かに中国語とドイツ語の二系列に対して三系列であるが、三上(1970)が指摘するように、コソアはコとソの対立とコとアの対立とも見なされる。また Sennholz(1985)及び Diewald(1991)の人称における「私 ich」と「君 du」の対立はコとソの対立に合致するが、Diewald(1991)の表 4 の「もの次元」に挙げられている「これ dieser」と「あれ jener」の対立はコとアの対立に合致する。つまり日本語のコソアの三系列は均等ではなく、ドイツ語のダイクシス体系における距離の二系列も決して一枚岩とはいえない。

次元に関していえば、日本語のこそあどは Sennholz(1985)及び Diewald(1991)によるドイツ語のダイクシス表現の体系と比較すると、「空間」や「もの」は満たすが、「時間」や「人称」の次元に欠けている。しかしその用法を詳細に考えるならば、「これから」や「これまで」という時間的表現において「これ」は「今」に相当する時間的意味を表す。「こちら」や「そちら」は本来方角を表すが、例(1)で示したように、場合により「こちら」で話し手を、「そちら」で聞き手を表すこともできる。仮にこそあどを空間次元の範疇に属するとするならば、こうした事例は空間から時間及び人称への次元を超えた転義ともいえる。

このような距離における矛盾や次元を超えた転義に関連する指摘はすでに見受けられるが、しばしば距離と次元の区別が看過されている。しかし距離と次元は、指示詞の体系を支える要であると同時に、言語を超えた比較・対照にも耐える基準である。今後は指示詞の諸問題を距離と次元に基づいて明確化したうえで議論することを課題としたい。

参考文献

井出至 **(1958)**:「代名詞」『続日本文法講座 I　文法各論編』 pp. 111-133. 明治書院

岡村和江 **(1972)**:「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2』 pp. 79-121. 明治書院

金井勇人 **(2005)**:「〈話し手〉を指す「こちら」の 2 用法」『国語学研究と資料』28, pp. 37-47. 国語学研究と資料の会

木村英樹 **(1992)** :「中国語指示詞の「遠近」対立についてー「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』 pp. 181-211. くろしお出版

金水敏・**木村**英樹・**田窪**行則 **(1989)** :『日本語文法　セルフマスターシリーズ 4　指示詞』くろしお出版

久慈洋子・**斎藤**こずゑ **(1982)** :「子どもは世界をいかに構造化するか—deictic words の獲得ー」秋山高二・山口常夫・F・C・パン（編）『言語の社会性と習得』 pp. 221-244. 文化評論出版

佐久間鼎 **(1983)** :『現代日本語の表現と語法（増補版）』くろしお出版

迫田久美子 **(1998)** :『中間言語研究ー日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得ー』渓水社

正保勇 **(1981)**:「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 pp. 51-122. 国立国語研究所

鈴木孝夫 **(1973)** :『ことばと文化』岩波書店

瀧田恵巳 **(1999)** :「言語における指示詞の意味について（上）」『言語文化研究』第 25 号 pp. 331-346. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳 **(2001)** :「言語における指示詞の意味について（下）」『言語文化研究』第 27 号 pp. 415-433. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳 **(2005)** :「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類についてーDiewald(1991)による her と hin 及びその二重不変化詞の分類を例に—」『言語文化共同研究プロジェクト 2004：言語における時空を巡ってⅢ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科

時枝誠記 **(1941/2007)** :『国語学原論（上）』岩波書店 2007 （底本：『国語学原論』 岩波書店 1941）

服部四郎**(1968/1992)** :「コレ、ソレ，アレと this, that」金水敏・田窪行則（編）『指示詞』 pp. 47-53. ひつじ書房 1992（底本：『英語基礎語彙の研究』 pp. 71–80. 三省堂 1968）

バンヴェニスト，E. **(1983)**（岸本通夫監訳）:『一般言語学の諸問題』みすず書房

古田東朔**(1980/1992)** :「コソアド研究の流れ（一）」金水敏・田窪行則（編）『指示詞』 pp. 7-31. ひつじ書房 1992 （底本：『人文科学科紀要』71, pp. 119-156. 東京大学教養学部人文科学科 1980）

三上章**(1970)** :「コソアド抄」『文法詳論集』 pp. 145-154. くろしお出版

渡辺伸治**(2009)** :「ダイクシスの定義と下位分類」『言語文化研究』第 35 号 pp. 161-178. 大阪大学大学院言語文化研究科

Bühler, Karl **(1934/1982)**: *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache.* Fischer, Stuttgart, 1982. (Nachdruck von 1934).

Diewald, Gabriele Maria **(1991)**: *Deixis und Textsorten im Deutschen.* Niemeyer, Tübingen.

Sennholz, Klaus **(1985)**: *Grundzüge der Deixis.* Brockmeyer, Bochum.